

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

木 戸 前 塚
上谷津台南遺跡f地点
役山東遺跡c地点
高津新田野馬堀遺跡j地点
内野南遺跡e地点
麦丸遺跡g地点
逆水遺跡g地点
役山遺跡b地点
道地遺跡f地点
麦丸遺跡h地点
南海道遺跡a地点

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成23年度

発行日 平成24年3月28日

編集・発行 八千代市教育委員会 教育総務課
〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2
TEL. 047-483-1151

印刷 株式会社 山下印刷

平成23年度
八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成22年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。報告書作成作業は、平成23年度事業として行った。
2. 本書に収録した発掘調査は、以下のとおりである。

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	本戸前塚	大和田新田字新木戸前119-1ほか	平成22年4月19日～平成22年5月7日	60㎡/563㎡	宅地造成	常松成人
2	上谷津台南遺跡f地点	上高野字上谷津台1103-7ほか	平成22年6月15日～平成22年7月2日	70㎡/655㎡	宅地造成	森 竜哉
3	役山東遺跡c地点	米本字役山2436-17	平成22年8月6日～平成22年8月17日	150㎡/1,430㎡	資材置場・駐車場	常松成人
4	高津新田野馬堀遺跡j地点	八千代台西九丁目452-1ほか	平成22年8月9日～平成22年8月16日	106㎡/1,080㎡	店舗建設	森 竜哉
5	内野南遺跡e地点	吉橋字内野1102-2の一部ほか	平成22年9月7日～平成22年9月24日	90㎡/1,072.61㎡	集合住宅	森 竜哉
6	麦丸遺跡g地点	大和田新田字麦丸台649-60・61	平成22年11月10日～平成22年11月15日	26㎡/336.45㎡	宅地造成	常松成人
7	逆水道跡g地点	米本字逆水1217-1	平成22年11月16日～平成22年12月2日	430㎡/4,255㎡	宅地造成	常松成人
8	役山遺跡b地点	米本字鳥ヶ谷1127-1の一部	平成22年12月16日～平成22年12月27日	102㎡/999.99㎡	産業廃棄物中間処理施設	常松成人
9	道地遺跡f地点	平戸字沼上36-4の一部	平成23年1月11日～平成23年1月18日	上層25㎡ 下層5.5㎡/248.14㎡	個人住宅	常松成人
10	麦丸遺跡b地点	大和田新田字麦丸台649-9	平成23年1月24日～平成23年1月28日	200㎡/1,986.59㎡	宅地造成	常松成人
11	南海道遺跡a地点	萱田字西堀737-2	平成23年3月2日～平成23年3月8日	16㎡/172.8㎡	個人住宅	常松成人

3. 遺構Noは、数字と記号（アルファベット）の組合せで表記した。記号は、以下のとおりである。
トレンチ T 土坑 P 溝跡 M
4. 土層説明・出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については、土壌学及び国際法の基準に従い、以下のとおりである（単位:mm、礫の大きさは長径）。
巨礫300～200、大礫200～100、中礫100～50、小礫50～10、細礫10～2、粗砂2～0.2、細砂0.2～0.02
5. 出土した遺物のほか、写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
6. 本書の図版作成は、常松成人・山下千代子が行い、遺物写真撮影・編集・執筆は常松が担当した。

本文目次

凡例

目次

挿図・表目次

写真図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	
1. 木戸前塚	5
2. 上谷津台南遺跡 f 地点	9
3. 役山東遺跡 c 地点	12
4. 高津新田野馬堀遺跡 j 地点	15
5. 内野南遺跡 e 地点	18
6. 麦丸遺跡 g 地点	21
報告書抄録	42

7. 逆水遺跡 g 地点	23
8. 役山遺跡 b 地点	27
9. 道地遺跡 f 地点	32
10. 麦丸遺跡 h 地点	35
11. 南海道遺跡 a 地点	38

挿図・表目次

第1図 平成22年度調査市内遺跡位置図	3	第23図 逆水遺跡 g 地点位置図	23
第2図 木戸前塚位置図	5	第24図 逆水遺跡 g 地点遺構配置図	24
第3図 木戸前塚遺構配置図	6	第25図 逆水遺跡 g 地点土層断面図	24
第4図 木戸前塚土層断面図	7	第26図 逆水遺跡 g 地点出土遺物	25
第5図 木戸前塚出土遺物	7	第27図 役山遺跡 b 地点位置図	27
第6図 上谷津台南遺跡 f 地点位置図	9	第28図 役山遺跡 b 地点出土遺物	28
第7図 上谷津台南遺跡 f 地点トレンチ配置図	10	第29図 役山遺跡 b 地点遺構配置図	29
第8図 上谷津台南遺跡 f 地点出土遺物	10	第30図 役山遺跡 b 地点土層断面図	29
第9図 上谷津台南遺跡 f 地点土層断面図	10	第31図 道地遺跡 f 地点位置図	32
第10図 役山東遺跡 c 地点位置図	12	第32図 道地遺跡 f 地点トレンチ配置図	33
第11図 役山東遺跡 c 地点遺構配置図	13	第33図 道地遺跡 f 地点土層断面図	33
第12図 役山東遺跡 c 地点土層断面図	13	第34図 道地遺跡 f 地点出土遺物	33
第13図 高津新田野馬堀遺跡 j 地点位置図	15	第35図 麦丸遺跡 h 地点遺構配置図	36
第14図 高津新田野馬堀遺跡 j 地点遺構配置図	16	第36図 麦丸遺跡 h 地点土層断面図	36
第15図 高津新田野馬堀遺跡 j 地点出土遺物	16	第37図 麦丸遺跡 h 地点出土遺物	36
第16図 内野南遺跡 e 地点位置図	18	第38図 南海道遺跡 a 地点位置図	38
第17図 内野南遺跡 e 地点トレンチ配置図	19	第39図 南海道遺跡 a 地点遺構配置図	39
第18図 内野南遺跡 e 地点土層断面図	19	第40図 南海道遺跡 a 地点土層断面図	39
第19図 内野南遺跡 e 地点出土遺物	19	第41図 南海道遺跡 a 地点出土遺物	39
第20図 麦丸遺跡 g 地点・h 地点位置図	21		
第21図 麦丸遺跡 g 地点トレンチ配置図	22	第1表 役山遺跡 b 地点出土遺物観察表	29
第22図 麦丸遺跡 g 地点土層断面図	22		

写真図版目次

図版1	木戸前塚	8	図版7	逆水遺跡g地点	26
図版2	上谷津台南遺跡f地点	11	図版8	役山遺跡b地点(1)	30
図版3	役山東遺跡c地点	14	図版9	役山遺跡b地点(2)	31
図版4	高津新田野馬堀遺跡j地点	17	図版10	道地遺跡f地点	34
図版5	内野南遺跡e地点	20	図版11	麦丸遺跡h地点	37
図版6	麦丸遺跡g地点	22	図版12	南海道遺跡a地点	40

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進み、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにその傾向を強め、沿線を中心とした新しいまちづくりが進んでいる。こうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では、千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者等から事前手続きとして提出される「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」という。）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。確認調査が必要と判断される事業については、国庫及び県費の補助を受け、「市内遺跡発掘調査事業」として調査を実施している。

以下は、平成22年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

木戸前塚

平成21年12月、鈴木美登氏（以下「事業者」という。）から大和田新田字新木戸前の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は山林・畑地・道路で、山林部分に周知の埋蔵文化財である木戸前塚が所在していた。市教委は、「確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと、「その取扱いについて協議したい旨（以下「遺跡が所在する旨」という。）を平成22年1月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。塚1基の存在は目視で明らかであったが、塚範囲の確定と周辺に付属施設がないか、また周囲の盛土や北側の窪地の状況を確認するため、塚周辺の確認調査を実施することとした。平成22年2月、事業者は法第93条第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「法第93条の届出」という。）を提出するとともに、塚周辺の伐採を実施した。市教委は、4月19日に調査を開始した。

上谷津台南遺跡 f 地点

平成22年3月、土地所有者の秋本龍男氏から、上高野字上谷津台の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地・山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるが、大半は平成7年度に発掘調査を実施した区域であり、その際に縄文時代の遺構・遺物が検出されている。一部に未調査区域があり、そこには土塁状の高まりも認められたため、そこについて確認調査が必要と判断された。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同年5月、事業者である株式会社稲毛土地から法第93条の届出が提出され、6月15日に調査を開始した。

役山東遺跡 c 地点

平成22年7月、大木邦男氏（以下「事業者」という。）から米本字役山の資材置場・駐車場建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は山林で、地表面観察はできなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、西側隣接地で土師器片の散布を確認し、また周辺で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、事業者から法第93条の届出が提出され、8月6日に調査を開始した。

高津新田野馬堀遺跡 j 地点

平成 22 年 3 月、谷原利彦氏（以下「事業者」という。）から八千代台西九丁目の店舗建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地及び畑地で、一部に周知の埋蔵文化財である高津新田野馬堀遺跡の堀跡が存在する可能性が考えられた。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同年 6 月、事業者から法第 93 条の届出が提出され、8 月 9 日に調査を開始した。

内野南遺跡 e 地点

平成 22 年 8 月、高橋和清氏（以下「事業者」という。）から吉橋字内野の集合住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は駐車場で、地表面観察は不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、周辺で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同年 9 月、事業者から法第 93 条の届出が提出され、9 月 7 日に調査を開始した。

麦丸遺跡 g 地点

平成 22 年 10 月、株式会社ボロ代表取締役岩崎富久子氏（以下「事業者」という。）から大和田新田字麦丸台の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地で、地表面に遺物は確認されなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、周辺で遺物が検出されている。市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、事業者から法第 93 条の届出が提出され、11 月 10 日に調査を開始した。

逆水遺跡 g 地点

平成 22 年 11 月、高橋昭氏（以下「事業者」という。）から米本字逆水の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は工場跡地で、地表面観察はできないが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、周辺で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、事業者から法第 93 条の届出が提出され、11 月 16 日に調査を開始した。

役山遺跡 b 地点

平成 22 年 11 月、有限会社池田鋼業代表取締役池田延史氏（以下「事業者」という。）から米本字烏ヶ谷の産業廃棄物中間処理施設建設事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は駐車場・資材置場で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、一部に遺物の散布が認められた。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同年 12 月、事業者から法第 93 条の届出が提出され、12 月 16 日に調査を開始した。

道地遺跡 f 地点

平成 22 年 11 月、館野銀次氏（以下「事業者」という。）から平戸字沼上の個人住宅建設事業に係る確認依頼が提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、遺物の散布が認められ、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回



第1図 平成22年度調査市内遺跡位置図

(八千代市都市計画基本図に加筆)

答し、取扱の協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同年12月、事業者から法第93条の届出が提出され、翌年1月11日に調査を開始した。

麦丸遺跡 h 地点

平成22年12月、株式会社スワロ代表取締役大矢赫子氏（以下「事業者」という。）から大和田新田字麦丸台の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は栗林で、地表面に遺物は確認されなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、同遺跡内においては遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を同月に回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、事業者は法第93条の届出を提出し、調査に先立って栗の木をすべて伐採した。市教委は平成23年1月24日に調査を開始した。

南海道遺跡 a 地点

平成23年1月、笠川隆弘氏（以下「事業者」という。）から萱田字西堀の個人住宅建設事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は宅地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、遺物の散布が認められた。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、事業者から法第93条の届出が提出され、3月2日に調査を開始した。

Ⅱ 各調査の概要

1. 木戸前塚

遺跡の立地と概要

木戸前塚は、市域の南西部、国道296号（成田街道）付近に所在し、高津川谷を南に臨む台地上に立地する。本塚は、土地所有者である鈴木家の氏神として敷地内にあったものであるが、市道高津1号線が鈴木家の敷地を分断して通され、その際に母屋などが西に移動されたため、現在は母屋と離れて畑地の中に存在している。塚の麓には享和元（1801）年9月建立の馬頭観音と屋敷神（文字判読できず）の2基の石碑が、頂上には近年移設された不動明王の石祠1基が存在したが、麓の2基は鈴木家の母屋近くに移設され、頂上の1基は処分された。塚と周辺には竹や雑木が生えていたが、調査に先立ち、事業者がこれらを伐採した。

塚の北側には窪地が認められ、塚封土の供給源ではないかと予想された。また対象地北西部に若干の高まりが認められた。これらの状況を確認するとともに、塚の範囲や付属施設を確認する目的で調査を実施した。

調査の方法と経過

調査区に任意に方眼杭を設置し、これに合わせてトレンチを8箇所設定し、さらに塚の麓から放射状のトレンチを2箇所設定し、トレンチNoを1T～10Tとした。トレンチ面積は合計60m²である。これらを重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成22年4月19日から5月7日で、4月19日機材搬入、杭打ち、トレンチ設定、20日～21日重機による掘削、20日～30日トレンチ内精査、26日～5月7日土層調査、実測記録作業、7日機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

塚に関わるトレンチは1T～6Tである。1Tでは、塚麓側に覆土暗褐色土の土坑が検出された。2Tでは、

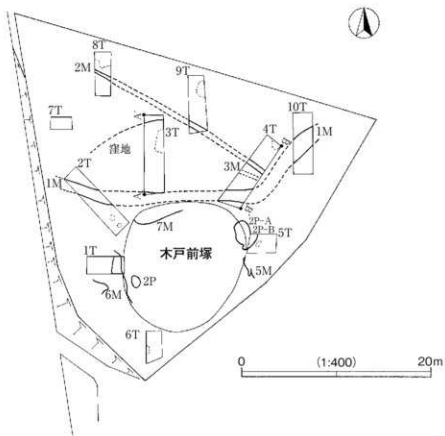


第2図 木戸前塚位置図

溝跡を検出した。3Tは、塚の麓から窪地にかけて設定し、その西壁の土層は、表土I-2層がしまりの弱い暗褐色土で、層厚20～66cmであった。II-1層は暗褐色・灰褐色土、II-2層は暗褐色土、礫石が出土。II-3層はローム混じりの暗褐色土、II-4層は黒褐色土・暗褐色土・ロームが混じり合っていた。最下層は、III～IV・V層のソフトローム～ハードローム層であった。基本層序の漸移層やソフトロームの大半が失われており、攪乱が激しいと判断される。なお、近世・近代以降と考えられる土坑を検出した。4Tでは、溝跡3条が認められ、東壁の土層は、I-1層が黒褐色表土、I-2層が暗褐色表土で、ともにしまりが弱い。II-2層は暗褐色土、II-3層は暗褐色～褐色土で、最下層は、ソフトローム～ハードローム層であった。I-2層以下はそれぞれ3Tの土層に対応すると考えられる。3T同様、基本層序が失われており、攪乱が激しいと判断される。溝跡覆土は、径1～3mmの黄色スコリアを含む黒褐色土であった。他に近世・近代以降と考えられる土坑を検出した。5Tでは、塚麓側に覆土黒色～暗褐色土の土坑が検出され、礫石などが出土した。6TではIIc層（ローム漸移層）が認められた。

7Tは、盛土のような高まりが認められた所に設定した。盛土には、ビニール系のゴミが入っており、ごく新しいものと判断された。8Tでは攪乱や根切溝が認められた。この根切溝は、9T・4Tにつながるもので、現在も地表に痕跡の残るものである。9Tでは攪乱、10Tでは溝跡が検出された。

遺物としては、近世以降の陶器11点、礫石2点、寛永通宝1点、焼成粘土塊6点、小礫5点など合計35点が出土した。このうち5点を図示した。1は、縄文土器で、隆線・沈線・RL縄文が施される。淡褐色で細砂を含む。中期加曾利E式であろう。地表面採集品である。2は、陶器の小皿で、ロクロ成



第3図 木戸前塚遺構配置図（本調査の結果を反映させた）

形、褐色の釉葉が施される。復元口径72mm、復元底径30mm、高さ19mmである。2Tから出土した。3は、火鉢の底部で、回転印刻の格子文が施される。暗褐色～黒褐色で細砂を含む。3Tから出土した。4は、砥石で、一部欠損、長さ96mm、幅29mm、厚さ22mmである。灰褐色の緻密な石である。二面が使用され、未使用の側面に、細かい筋が残る。3TⅡ-2層から出土した。5は、寛永通宝で、縁外径23.8mm、縁内径19mm、郭外径7.5mm、縁内径一辺6.5mm、厚さ0.9mm、重量1.8gである。4Tの塚裾部で出土した。

調査のまとめ

塚の麓には土坑2基と溝跡(1M)が検出された。土坑は、1Tと5Tにあり、塚に伴う近世土坑と判断した。1M溝跡は2T～3T～4Tと続くものと見られ、塚を避けるように掘られているため、塚よりも新しい近世・近代のものとして判断した。2M溝跡は、現在も痕跡が残る根切溝である。3M溝跡も根切溝状であるが、不明瞭であった。

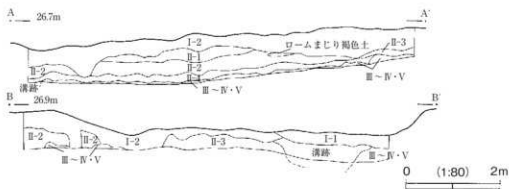
3Tにおいて窪地の土層を観察した。窪地は、3Tを中心とし2T・4T付近に広がるものと判断した。7Tにおいて高まりの土層を観察し、塚ではないことを確認した。ほかに3T・4Tに近世・近代の土坑各1基、10Tに近世・近代の溝跡1条を検出した。

全体的に基本層序が失われており、攪乱が激しかったものと判断した。

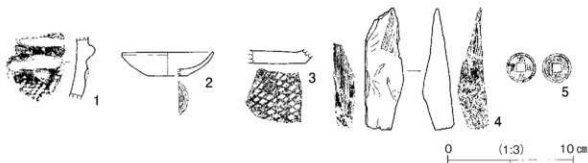
この結果、塚の範囲160㎡を協賛範囲とし、記録保存のため本調査を平成22年度内に実施した。本調査の結果、1Tの土坑は、塚封土の供給源である溝状遺構となり、5Tの土坑は、塚構築後の土坑と判断した。また本調査後に確認調査結果を再検討し、1M溝跡と10Tの溝跡は、同一のものと判断した。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会(2011年)『千葉県八千代市木戸前塚一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』



第4図 木戸前塚土層断面図



第5図 木戸前塚出土遺物

図版1 木戸前塚



(1) 調査前状況-1-



(2) 調査前状況-2-



(3) 5T 遺構検出状況



(4) 3T 土層断面 (A-A')



(5) トレンチ完掘状況-1-



(6) トレンチ完掘状況-2-



(7) 出土遺物 (番号は、第5図と同一)

2. 上谷津台南遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は、市域の南東部、佐倉市との市境付近に所在し、井野上谷津に臨む台地上に立地する。本遺跡については、これまでに5地点が調査され、遺構としては縄文時代の狩猟用陥穴が、遺物としては縄文時代後期堀之内式～加曾利B式の土器や石器が検出されている。

今回の調査地点は a 地点に接した区域で、一部に土塁状の高まりが認められた。台地上の平坦面で標高は 26m 前後である。

調査の方法と経過

土塁状の高まりなどに対し、任意に8箇所計70㎡分のトレンチを設定し、重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成22年6月15日から7月2日で、6月15日・16日機材搬入等。17日・21日草刈り等環境整備。22日・24日・25日トレンチ設定、土塁測量。25日・28日重機による掘削。28日・29日トレンチ内精査。29日・30日土層調査。7月2日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

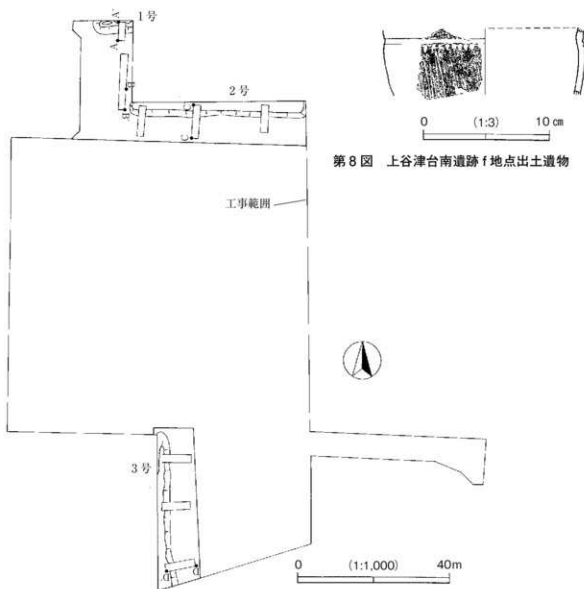
調査の概要

土塁状の高まりを北から1号、2号、3号とし、それぞれにトレンチを設定し、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）まで掘り下げて土層を観察した。1号のA-A'では、I-1がしまりのごく弱い土で、I-2はコンクリート片等の入った盛土であった。その下にはⅡa層（黒褐色土、腐食土層）、Ⅱc層（褐色土、ローム漸移層）が認められた。2号のC-C'では、I-1がやはりしまりのごく弱い土で、I-2は耕作土、その下にはⅡa層、Ⅱc層が認められた。3号のD-D'では、I-1がやはりしまりのごく弱い土で、I-2は耕作土、その下にはⅡa層、Ⅱb層（褐色土、新期富士テフラ層）、Ⅱc層という良好な堆積が認められた。土塁状の高まりは、盛土や攪乱、耕作土の上に載ったしまり脆弱な土から成り、ごく新しいものであった。Ⅲ層までの深さは、土塁状部分以外では40～60cmであった。

遺物は、2号東トレンチから縄文土器片4点（同一個体）が得られた。うち1点を図示した。深鉢の胴上部で、外面には無文帯、横方向沈線・押し引き状の刺突列、縦方向条線が施される。黒褐色～暗褐色

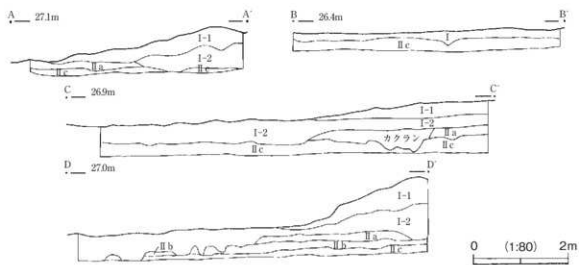


第6図 上谷津台南遺跡 f 地点位置図



第8図 上谷津台南遺跡f地点出土遺物

第7図 上谷津台南遺跡f地点トレンチ配置図



第9図 上谷津台南遺跡f地点土層断面図

図版 2 上谷津台南遺跡 f 地点



(1) 1号T完掘状況



(2) 2号中央T完掘状況



(3) 3号南T土層断面 (D-D')



(4) 出土遺物

で、粗砂・細砂を含む。復元外径（胴部最大径）は、160mmである。後期後葉のものと考えられる。

調査のまとめ

縄文土器が出土したが、遺構は検出されなかった。土層状の高まりは、近年の盛土であることがわかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1997年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』（a地点、b地点）

八千代市教育委員会（2000年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』（c地点）

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（d地点）

八千代市教育委員会（2007年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』（e地点）

3. 役山東遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

役山東遺跡は、市域の北東部、保品・神野遺跡群の一角にある。新川（旧印旛沼）の低地から西に入る栗谷津と、新川の低地から南に入る鳥ヶ谷津とに挟まれた台地上、標高 18～25.5m に立地する。

本遺跡では、a 地点として栗谷津に面した面積 3,330m²を、(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業に伴い本調査し、縄文時代早期～中世の遺構・遺物を検出した。b 地点では、縄文時代及び古墳時代の遺構・遺物を検出した。今回の地点は、標高 25m 前後の台地上平坦面である。

調査の方法と経過

樹木が不規則に生えた山林であるため、トレンチを規則正しく配置できなかった。2m×4～10m のトレンチを任意に 13 箇所計 150m²分設定した。重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 22 年 8 月 6 日から 17 日で、6 日機材搬入、トレンチ設定。9 日・10 日重機による掘削。10 日～12 日トレンチ内精査、遺構を検出する。12 日・13 日トレンチ・遺構実測。13 日・16 日・17 日土層調査。17 日機材を撤収し、調査を終了した。

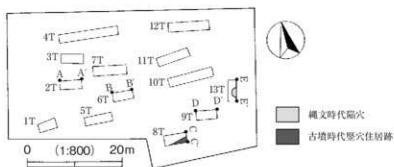
調査の概要

調査区は、平坦であるが、東が高く西にわずかに傾斜している。土層の観察所見としては、しまりの弱い表土が厚かったが、比較的良好な土層堆積を認めた。調査区西部の 2T 北壁では、I 層が暗褐色・褐色の表土、以下 II a 層（黒褐色土・暗褐色土、腐食土層）、II b 層（暗褐色土で褐色土が斑状に入る、新期富士テフラ層）、II c 層（褐色土、ローム漸移層）、III 層（褐色土、ソフトローム）であった。III 層までの深さは 53～63cm である。調査区中央付近の 6T 北壁もほぼ同じ状況であった。東部の 9T では、地表下 46～58cm で III 層に達し、さらに 74～86cm で IV・V 層ハードロームに達した。

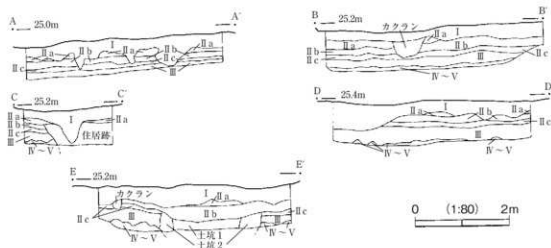
遺構は、調査区東部の 13T で土坑 1 基が検出された。遺物は出土しなかったが、覆土上層を II b 層が覆っており、縄文時代の陥穴と推定した。覆土は、中央が黒褐色土で、壁際は褐色土である。また南東部の 8T では、竪穴住居跡 1 軒を確認した。遺物は土師器小片のみであるが、概ね古墳時代前期に属するものと判断した。覆土は黒褐色土・暗褐色土であった。



第 10 図 役山東遺跡 c 地点位置図



第11図 役山東遺跡c地点遺構配置図



第12図 役山東遺跡c地点土層断面図

遺物は、7Tから土師器片5点、8Tから土師器片3点・焼成粘土塊1点、合計9点が出土した。土師器は、いずれも小細片であるが、概ね古墳時代前期に属するものと判断した。図は省略した。

調査のまとめ

縄文時代の陥穴と考えられる土坑1基、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒が検出された。本遺跡では、栗谷津に面するa地点、鳥ヶ谷津に近いb地点それぞれで遺構・遺物が検出されていたが、さらに今回、台地中央部に近い地点でも遺構の存在を捉える事ができた。今後、台地縁辺部だけでなく、台地中央部の調査においても注意が必要であることがわかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（2004年）『千葉県八千代市栗谷遺跡 役山東遺跡 雷南遺跡 雷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書1—第3分冊—』（a地点）

八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』（b地点）

図版3 役山東遺跡c地点



(1) 遺跡近景



(2) 調査前状況



(3) 8T 遺構検出状況



(4) 8T 土層断面 (C-C')



(5) 13T 遺構検出状況及び土層断面 (E-E')



(6) 9T 土層断面 (D-D')

4. 高津新田野馬堀遺跡 j 地点

遺跡の立地と概要

高津新田野馬堀遺跡は、市城南西部、千葉市との市境付近に所在する。市城南部を流れる高津川の低地から南西方向に入る足太谷津の谷奥に、さらに西に入る支谷があり、この支谷を北に臨む台地上に残っていた野馬土手・野馬堀を高津新田野馬堀遺跡と命名した。江戸幕府の直轄領であった小金牧に属する下野牧の南東端に当たる。

本遺跡においては、これまでに9地点で調査が行われ、野馬土手・野馬堀とも概ね2条が存在していたことがわかる。今回の地点は、遺跡の西端に当たる。宅地と赤道との境界であり、赤道側には野馬土手の痕跡と思われるわずかな高まりが観察された。標高25～26mの平坦面である。

調査の方法と経過

野馬堀が存在すると推定される地点に、任意のトレンチを6箇所106㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成22年8月9日から16日で、9日トレンチ設定、人力による掘削。10日・11日重機による掘削。10日～13日トレンチ内精査・実測記録。13日重機による埋め戻し。16日機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

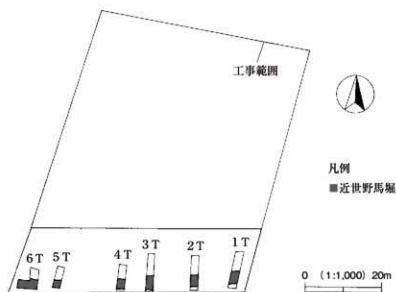
土層は、地表下46～56cm。場所によっては60～80cmが暗褐色の耕作土であり、その下部はソフトロームあるいはハードロームに達していた。残存状態は不良であり、土層断面図は省略した。

遺構は、各トレンチにおいて幅2.5～3.5mの溝跡を検出し、近世の野馬堀と判断した。深さは4Tで1m45cmであることを確認した。

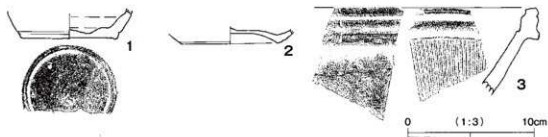
遺物は、陶磁器類7点、素焼土器2点、瓦片4点、合計13点が出土した。うち3点を図示した。1は、陶器（甕か）底部で、ロクロ成形、外面灰褐色で緑灰色の釉薬が施される。長石・粗砂・細砂を含む。底径76mm、残存高24mmである。4Tから出土した。2は、陶器の底部で、ロクロ成形、暗褐色・褐色の釉薬が施される。復元底径76mm、残存高12mmである。4Tから出土した。3は、素焼きの挿鉢口縁部で、



第13図 高津新田野馬堀遺跡 j 地点位置図



第14図 高津新田野馬堀遺跡j地点遺構配置図



第15図 高津新田野馬堀遺跡j地点出土遺物

ロクコ成形、暗橙褐色で、長石・粗砂を含む。復元口径31mmである。6Tから出土した。

調査のまとめ

予想どおり、野馬堀と見られる溝跡1条を検出することができた。高津新田野馬堀遺跡の範囲内で現在把握できている西の限界ということになるが、当然、野馬土手・野馬堀はさらに西に延びていたはずである。この地点から北西約3.6kmの船橋市との市境付近に、土手の痕跡が残っており、大和田新田野馬土手遺跡と命名している。これとj地点の南に隣接する赤道のみが、市内に残る下野牧関連の野馬土手の痕跡である。野馬堀については、地中に残っている箇所がまだ多く存在すると思われるので、今後注意して調査したい。

本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市教育委員会 (1991年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成2年度』(d地点)
- 八千代市教育委員会 (1993年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度』(e地点)
- 八千代市遺跡調査会 (1999年) 『千葉県八千代市高津新田野馬堀』(b地点)
- 八千代市教育委員会 (2002年a) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』(i地点)
- 八千代市教育委員会 (2002年b) 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』(g地点)
- 八千代市遺跡調査会 (2007年) 『千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡h地点』

図版 4 高津新田野馬堀遺跡 j 地点



(1) 調査状況-1-



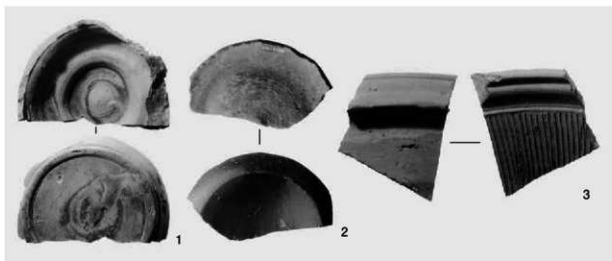
(2) 調査前状況-2-



(3) 1T 遺構検出状況



(4) 3T 遺構検出状況



(5) 出土遺物 (番号は、第15図と同一)

5. 内野南遺跡 e 地点

遺跡の立地と概要

内野南遺跡は、市の西部、花輪谷津を南に臨む台地上に立地する。

本遺跡においては、これまでに4地点で調査が行われている。縄文時代の遺構・遺物を主体とする遺跡と捉えられている。

今回のe地点は、遺跡の北端に当たり、標高は27m前後である。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、16m×126～150mのトレンチを4箇所、合計90m分設定した。重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成22年9月7日から24日で、7日機材搬入。7日・8日トレンチ設定。8日～10日・13日・14日重機による掘削、アスファルトや砕石敷きの駐車場であったため作業が難航した。9日・10日・13日～15日トレンチ内精査。17日・21日土層調査、実測記録。24日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区南東部の1T北西壁では、厚さ70～80cmの盛土があったが、その下にⅡa層（黒色土層、腐食土層）、Ⅱb層（暗褐色土、新期富士テフラ層）、Ⅱc層（ローム漸移層）が厚さ約40cm堆積しており、地表下114～124cmでⅢ層（ソフトローム）に達していた。調査区中央北西よりの3Tでは、やはり厚さ70cmの盛土があり、その下に黒色土層は認められたが、その直下がソフトロームであり、土層の残存状態は不良であった。

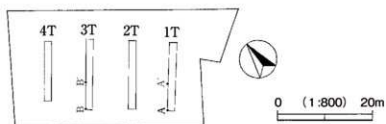
遺構は、検出されなかった。遺物は、1Tから土器片1点が出土したのみである。小片で、輪積痕が残り、細かいRL縄文が施文されている。暗灰褐色である。縄文時代後晩期のものと判断した。

調査のまとめ

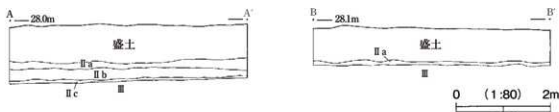
縄文土器が出土したが、遺構は検出されなかった。本地点は、遺跡北端に近い希薄な地点と言えよう。



第16図 内野南遺跡 e 地点位置図



第 17 図 内野南遺跡 e 地点トレンチ配置図



第 18 図 内野南遺跡 e 地点土層断面図



第 19 図 内野南遺跡 e 地点出土遺物

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会 (1999 年) [千葉県八千代市内道路発掘調査報告書 平成 10 年度] (b 地点)

八千代市道路調査会 (2000 年) [千葉県八千代市内野南遺跡 a 地点発掘調査報告書]

八千代市教育委員会 (2004 年) [千葉県八千代市内道路発掘調査報告書 平成 15 年度] (c 地点)

八千代市教育委員会 (2008 年) [千葉県八千代市内野南遺跡 d 地点発掘調査報告書—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査—]

八千代市教育委員会 (2009 年) [千葉県八千代市内道路発掘調査報告書 平成 20 年度] (d 地点確認調査)

図版5 内野南遺跡 e 地点



(1) 調査前状況



(2) 調査状況



(3) IT 完掘状況



(4) IT 土層断面 (A-A')



(5) 3T 完掘状況



(6) 3T 土層断面 (B-B')



(7) 出土遺物

6. 麦丸遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

麦丸遺跡は、市域中央部、新川西岸の麦丸支台上にある。新川谷とその支谷である栄重谷津、桑納川谷とその支谷である甚左衛門谷津によって画された台地上一帯が遺跡で、標高は24m以下である。g地点は遺跡南西部の標高23.4mの平坦地である。

本遺跡においては、これまでに6地点で調査が行われ、縄文時代早期の炉穴、早期～後期の遺物、弥生時代終末～古墳時代初頭の堅穴住居跡1軒、古墳時代の土師器などが検出されている。また、本遺跡の範囲内に塚が1基あり、金塚所在塚として調査し、近世の塚と判断した。

調査の方法と経過

調査区には樹木と倉庫があったため、これらを避けてトレンチを4箇所合計26m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成22年11月10日から15日で、10日機材搬入、トレンチ設定。11日重機による掘削、トレンチ内精査、土層調査。12日実測記録、機材撤収。15日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北西部の1T北西壁では、表土層は暗褐色土・褐色土・灰褐色土の混じり合ったしまりの弱い土で、厚さ14～28cm、その直下でハードロームに達している。調査区南東部の4T南西壁では、表土層はしまりの弱い褐色土で、厚さ20～40cm、やはりその直下でハードロームに達している。基本層序が残っておらず、土層の残存状態は不良であった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

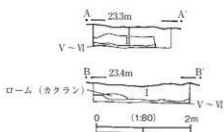
g地点は、土層の残存状態が悪く、遺構・遺物とも検出されなかった。



第20図 麦丸遺跡 g地点・h地点位置図



第 21 図 麦丸遺跡 g 地点トレンチ配置図



第 22 図 麦丸遺跡 g 地点土層断面図

本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市遺跡調査会 (1982 年) 『千葉県八千代市麦丸遺跡』(a 地点・b 地点)
- 八千代市教育委員会 (2002 年 a) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 13 年度』(d 地点)
- 八千代市教育委員会 (2002 年 b) 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書 1』(金塚所在塚)
- 八千代市教育委員会 (2003 年) 『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』(c 地点)
- 八千代市教育委員会 (2007 年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』(f 地点)

図版 6 麦丸遺跡 g 地点



(1) 調査前状況



(2) 1T 土層断面 (A-A')



(3) 4T 完掘状況



(4) 調査状況

7. 逆水遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

逆水遺跡は、市域北部、新川谷の低地から南に入る烏ヶ谷津と松輪支谷とに画された台地一帯に立地する。本遺跡においては、これまでに6地点で調査が行われ、縄文・弥生・中世・近世などの遺構・遺物が検出されている。

今回の g 地点は、遺跡の南部に位置する。北に隣接する f 地点では、遺構は検出されず、弥生土器片と寛永通宝が出土したのみであった。標高は 23.5～23.7m で、工場の敷地内であり、地形はある程度改変されていると判断された。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせてほぼ南北方向に 5m、東西方向に 10m で区画し、2m × 10m のトレンチを基本として 22 箇所、合計 430㎡ 分を設定した。重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 22 年 11 月 16 日から 12 月 2 日で、11 月 16 日機材搬入。16 日～17 日トレンチ設定。18 日・19 日・22 日重機による掘削。砕石や建設廃材のアスファルト片やコンクリート片等、瓦礫が埋められていたため重機をもってしても掘削は難航した。このため 19 日からは重機を 2 台態勢とした。18 日・19 日・22 日トレンチ内精査。24 日～26 日土層調査、実測記録。26 日機材撤収。29 日～12 月 2 日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

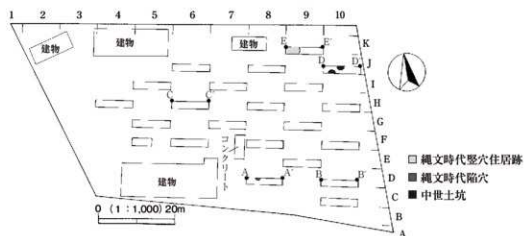
調査の概要

表土には、ほぼ全体に砕石や建設廃材を含む埋土が厚く認められた。攪乱も激しかったが、それらの下に良好な土層が残っている部分もあった。調査区中央やや西寄りの H-6T では、Ⅱ a 層（黒褐色土・暗褐色土、腐食土層）、Ⅱ b 層（暗褐色土、新期富士テフラ層）、Ⅱ c 層（暗褐色土・褐色土、ローム漸移層）、Ⅲ 層（褐色土、ソフトローム）、Ⅳ～Ⅴ 層（褐色土、ハードローム）が認められた。調査区中央やや東寄りの H-8T では、Ⅱ b 層、Ⅱ c 層、Ⅲ 層、Ⅳ～Ⅴ 層が認められた。調査区南東部の D-10T でも、Ⅱ b 層、Ⅱ c 層、Ⅲ 層、Ⅳ～Ⅴ 層が認められた。

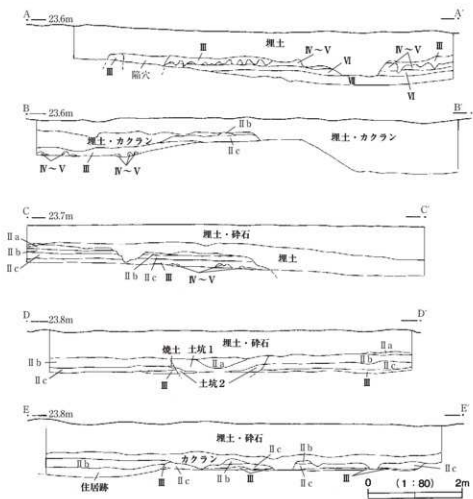
遺構は、調査区北東部の K-9T・J-10T、南部の D-8T で検出された。K-9T の遺構は、Ⅱ b 層以下



第 23 図 逆水遺跡 g 地点位置図



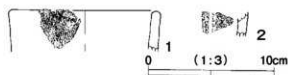
第 24 図 逆水遺跡 g 地点遺構配置図



第 25 図 逆水遺跡 g 地点土層断面図

に検出され、Ⅱc層を切って構築されている。覆土は、明褐色土を斑状に含む褐色土である。縄文土器を伴っており、規模から見て縄文時代の堅穴住居跡と判断した。D-8Tの遺構は、覆土が褐色土を雲状に含む暗褐色土で、遺物は出土しなかったが、形態から見て縄文時代の陥穴と判断した。J-10Tには土坑が2基検出された。同トレンチで縄文土器が出土しており、当初はこれらも縄文遺構かと思われたが、検討した結果、中世の土坑と判断した。覆土は、炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、黄色スコリアを少量含む褐色土、黄色スコリアを多量、炭化粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は、土器片7点、焼成粘土塊1点、合計8点が出土した。うち縄文土器2点を図示した。1は、深鉢の口縁部で、外面はナデ後縦方向のミガキが施されている。褐色で粗砂・細砂を含む。計測値は、復元口径120mm、残存高32mmである。K-9TのⅡb～Ⅲ層から出土した。2は、小片で、外面に縦方向の沈線と押しき状の刺突が施される。淡褐色で石英・長石・粗砂・細砂を含む。K-9Tから出土した。縄文時代中期初頭に属するものと判断した。



第26図 逆水遺跡g地点出土遺物

調査のまとめ

本地点は、攪乱が激しかったにもかかわらず、遺構・遺物が検出された。縄文時代の陥穴1基、中期初頭の堅穴住居跡1軒、中世の土坑2基を確認した。中世土坑については、本地点から北西180mのa地点で中近世の墓坑19基が検出されており、本地点の土坑も、これらに類似するものとする。

本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市教育委員会 (1996年) 『千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成7年度』(a地点)
- 八千代市教育委員会 (1997年) 『千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成8年度』(b地点)
- 八千代市教育委員会 (2003年a) 『千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成14年度』(c地点)
- 八千代市教育委員会 (2003年b) 『千葉県八千代市市内出土土器分析委託報告書Ⅱ』(a地点)
- 八千代市教育委員会 (2004年) 『千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成15年度』(d地点)
- 八千代市教育委員会 (2007年) 『千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成18年度』(e地点)
- 八千代市教育委員会 (2008年) 『千葉県八千代市 逆水遺跡・北裏畑遺跡・高津新田遺跡・西山遺跡・内野遺跡・段山遺跡・川崎山遺跡・ツサル山遺跡—不特定遺跡発掘調査報告書V—』(f地点)

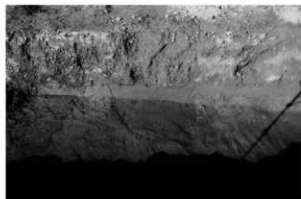
図版7 逆水遺跡 g地点



(1) 調査前状況



(2) K-9T 遺構検出状況



(3) D-8T 遺構検出状況



(4) J-10T 遺構検出状況



(5) D-10T 土層断面 (B-B')



(6) H-6T 土層断面 (C-C')



(7) 調査状況



(8) 出土遺物 (番号は、第26図と同一)

8. 役山遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

役山遺跡は、市域の北東部に所在し、新川の低地から南方向に入る鳥ヶ谷津を西に臨む台地上に立地する。本遺跡におけるこれまでの調査は a 地点のみで、そこでは土層の残存状態が不良で、遺構・遺物とも検出されなかった。今回の b 地点は、遺跡の中央西寄りに当たり、山林を切り開き資材置場・駐車場となっている。標高は約 24m である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて 5m 四方のグリッドで区画し、2m × 4～5m のトレンチを 13 箇所、合計 102m²を設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

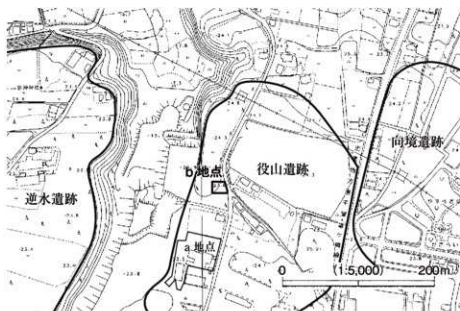
調査期間は、平成 22 年 12 月 16 日から 27 日で、16 日機材搬入、トレンチ設定、人力による掘削。20 日重機による掘削。20 日～21 日トレンチ内精査、遺構・遺物を検出する。21 日・22 日・24 日土層調査、実測記録。27 日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

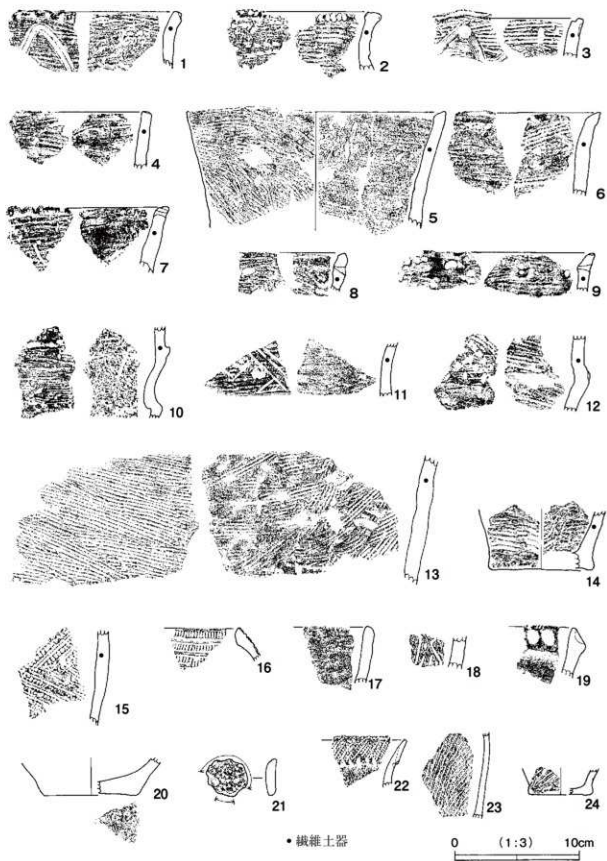
土層の観察所見としては、調査区北部の E-3～F-3T 西壁及び中央北西寄りの D-3T 西壁では、Ⅱ b 層 (E-3～F-3T では褐色土・明褐色土斑状、D-3T 西壁では暗褐色土・褐色土斑状、新期富士テフラ層)、Ⅱ b～Ⅱ c 層 (暗褐色～黒褐色土・褐色土斑状)、Ⅱ c 層 (褐色土、ローム漸移層)、Ⅲ 層 (褐色土、ソフトローム、層厚が 30cm 以上あるため上下に分けた。下の方がやや緻密)、Ⅳ～Ⅴ 層 (褐色土、ハードローム) が認められた。抜根のためと思われる攪乱が見られたが、比較的良好な土層を確認できた。

遺構は、縄文時代早期炉穴 10 基・土坑 7 基、弥生時代後期竪穴住居跡 2 軒、古墳時代前期方形周溝状遺構 1 基を検出した。特に調査区南西部の B-5T では、縄文時代の炉穴と弥生時代の住居跡、古墳時代方形周溝状遺構という各時代の遺構が集中して検出された。

遺物は、縄文土器 (早期～後期)、弥生土器 (後期)、古墳時代前期の土師器などの土器片が 711 点、礫や剥片が 19 点、合計 730 点が出土した。市内では出土例の少ない、縄文時代前期関山式の土器片が含まれていた。縄文時代早期を中心に 24 点を図示した。



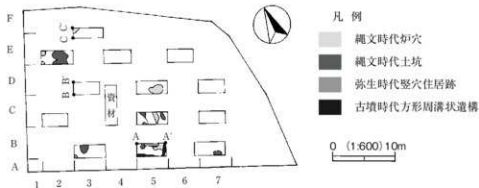
第 27 図 役山遺跡 b 地点位置図



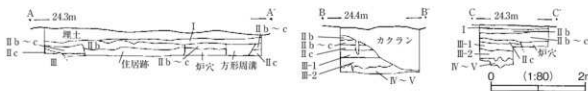
第28図 役山遺跡b地点出土遺物

第1表 役山遺跡b地点出土遺物観察表(第28図)

No.	出土地点	器形	状態・部位	計測値(mm)	土質	色調	形状・調整・文様などの特徴	その他
1	B6~7	深鉢	口縁部	残存高 46	○織成、粗砂	●暗褐色、淡褐色	外面) 口縁に斜行、垂文は横方向の条状文、その上に波状の沈線文、内面) 垂・斜方向の条状文。	
2	C-2	深鉢	口縁部	残存高 48	○織成、粗砂	●褐色	口内) 縦方向の条状文、外面) 横方向の斜行文、内面) 横方向の条状文。	
3	甕土	深鉢	口縁部	残存高 32	○織成、細砂	●淡褐色、淡橙褐色	外面) 垂文は横方向の条状文、その上に行文と細点の沈線文、内面) 横方向の条状文。	
4	B-5 II c-III層	深鉢	口縁部	残存高 45	○織成、細砂、粗砂	●褐色、暗褐色	口縁上に斜行、外面) 横方向の条状文、内面) 横方向の条状文。	
5	B6~7	深鉢	口縁部	残存高 93 底元径 206	○織成、細砂、粗砂	●黒褐色、暗褐色、淡褐色	外面) 横・斜方向の条状文、ナデ。	
6	B-3	深鉢	口縁部	残存高 66	○織成、粗砂	●淡橙褐色、淡褐色、灰褐色	外面) 横方向の条状文、内面) 横方向の条状文、ナデ。	
7	B-3	深鉢	口縁部	残存高 53	○織成、粗砂、赤褐色砂子	●褐色、灰褐色、淡褐色	口縁に斜行、横成窓孔 1箇所、外面) 横方向の条状文・垂文、内面) 横方向の条状文。	
8	B6~7	深鉢	口縁部	残存高 31	○織成、粗砂、粗砂	●黒褐色、暗褐色	横成窓孔 1箇所、内面が隆上する、外面) 横方向の条状文、内面) ナデ。	縄文早期 条状文系
9	B-3	深鉢	口縁部	残存高 31	○織成、細砂、粗砂	●灰褐色	口縁上に斜行、横成窓孔 2箇所、内面が隆上する、外面) 横方向の条状文、内面) ナデ、横方向の条状文。	
10	B-3	深鉢	胴上端 屈曲部	残存高 73	○織成、粗砂、赤褐色砂子	●褐色、橙褐色、灰褐色	外面) 横・斜方向の条状文・垂文、内面) 横・斜方向のナデ。	
11	B-3	深鉢	胴上端 屈曲部	残存高 43	○織成、粗砂	●褐色、淡褐色	外面) 垂文は横方向の条状文、内面) 横方向の条状文。	
12	D-7	深鉢	胴上端 屈曲部	残存高 61	○織成、粗砂、赤褐色砂子	●褐色、灰褐色、褐色	外面) 横方向の条状文の上・沈線・斜行文・斜行、内面) 横方向の条状文、斜方向の条状文。	
13	D-5	深鉢	胴部	残存高 100	○織成、粗砂	●暗褐色、橙褐色、褐色	外面) 斜方向の条状文、内面) 横・斜方向の条状文。	
14	B-2 II c-III層	深鉢	底部	残存高 48 底元径 82	○織成、粗砂	●暗褐色、灰褐色	外面) 斜方向の条状文、底外面) ナデ、内面) 横・斜方向の条状文、ナデ。	
15	甕土	深鉢	胴部	残存高 76	○織成、細砂、粗砂	●淡褐色、淡灰褐色	外面) 黄赤斜線文、3条一単位、内面) ナデ、ミダキ。	縄文中期 段山式
16	B-5	深鉢小	口縁部	残存高 31	○粗砂、粗砂	●淡橙褐色、淡褐色、橙褐色	外面) 斜行文、沈線、内面) ナデ。	縄文中期 五輪・付式
17	C-2	深鉢	口縁部	残存高 46	○粗砂、赤褐色砂子	●淡橙褐色、淡褐色	外面) 横方向ナデ、内面) 横方向ナデ。	
18	C-2	深鉢	胴部	残存高 26	○粗砂	●赤褐色	外面) 沈線、短沈線、ナデ、ミダキ、内面) ナデ、ミダキ。	縄文中期 段山式
19	C-2	深鉢	口縁部	残存高 41	○粗砂、粗砂	●淡橙褐色	外面) 行文、その右下が波状、その下はミダキ、内面) ナデ、ミダキ。	
20	B-3	深鉢	底部	残存高 30 底元径 76	○粗砂	●橙褐色、褐色、暗褐色	外面) ナデ、ミダキ、底外面) ナデ、内面) ナデ、ミダキ。	
21	B-2	土器片(甕)	断面部	29 × 33、厚さ 7	○粗砂	●褐色、赤褐色	外面) 斜線文、内面) ナデ。	
22	C-5	甕	口縁部	残存高 41	○粗砂	●淡褐色、灰褐色	肩合口縁、口縁上に横文、外面) 肩加条状文 1条・2条、口内斜管による斜線文、内面) 横方向ナデ。	弥生後期
23	B-5	甕	胴下部	残存高 49	○粗砂、粗砂	●褐色、黒褐色	外面) 肩加条状文 1条・2条、内面) ナデ、ミダキ。	弥生後期
24	C-2	甕	底部	残存高 21 底元径 50	○粗砂、細砂	●暗褐色、橙褐色	外面) 肩加条状文、底外面) ナデ、ミダキ、内面) ナデ。	弥生後期



第29図 役山遺跡b地点遺構配置図



第30図 役山遺跡b地点土層断面図

図版8 役山遺跡b地点(1)



(1) 調査前状況



(2) 調査状況



(3) B-3T 遺構・遺物検出状況



(4) B-5T 遺構検出状況



(5) E-2T 遺構・遺物検出状況



(6) B-5T 土層断面 (A-A')

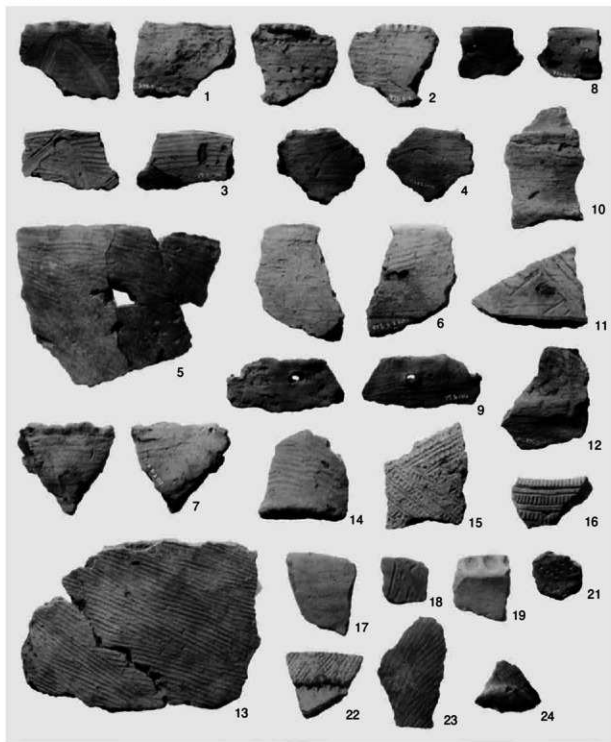


(7) D-3T 土層断面 (B-B')



(8) E-3 ~ F-3T 土層断面 (C-C')

図版9 役山遺跡b地点(2)



出土遺物(番号は、第28図と同一)

調査のまとめ

本地点は、遺構・遺物とも密度の高い地点であった。今回の調査により、本遺跡が縄文時代早期の炉穴群・早期～中期の土坑群、弥生時代後期の集落跡、さらに古墳時代前期の墓域であるという新知見を得ることができた。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会(2008年)『千葉県八千代市 逆水遺跡 北裏畑遺跡 高津新田遺跡 西山遺跡 内野遺跡 役山遺跡 川崎山遺跡 ツサル山南遺跡—不特定遺跡発掘調査報告書V—』(a地点)

9. 道地遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

道地遺跡は、市域北部、新川と神崎川とが合流する地点を東に臨む台地上に所在する。本遺跡においては、これまでに6地点で調査が行われている。弥生時代後期の集落跡、古墳時代前期・中期・後期の集落跡などが検出されており、遺構密度の高い遺跡と認識されている。今回のf地点は、遺跡のやや北寄りに当たり、現況畑地で標高は20.3m前後である。近隣の県道で堅穴住居跡が濃密に検出されており、本地点でも同様の結果が得られるものと予想した。

調査の方法と経過

住宅の基礎への影響を考慮し、建設予定地を避けて、2m×3mのトレンチを3箇所、1m×3m及び1m×4mのトレンチを各1箇所合計25㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年1月11日から18日で、11日杭設置、トレンチ設定、人力による掘削。12日重機による掘削、トレンチ内精査。13日～14日土層調査、実測記録、下層調査。14日機材撤収。18日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

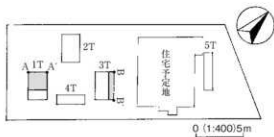
調査の概要

土層の観察所見としては、調査区中央の3T北東壁では、表土及び耕作土が厚さ40cmあり、攪乱もあったが、Ⅱa層(黒褐色土・暗褐色土、腐食土層)、Ⅱb層(暗褐色土・褐色土、明褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層)、Ⅱc層(褐色土、ローム漸移層)、Ⅲ層(褐色土、ソフトローム、やや暗色な上部と明色の下部とに分けた)、Ⅳ～Ⅴ層(褐色土、ハードローム)という良好な土層が認められた。調査区南部の1T北西壁では、表土下に厚さ40cmの耕作土があり、Ⅱb層(褐色土、明褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層)、Ⅱc層(褐色土、ローム漸移層)、Ⅲ層(褐色土、ソフトローム)、Ⅳ～Ⅴ層(褐色土、ハードローム)が認められた。ソフトロームの標高が19.6～19.8m、ハードロームの標高が19.3～19.6mであった。

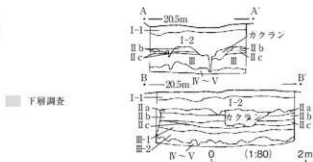
遺構は、検出されなかった。遺物は、土器片26点、小礫・石器各1点、合計28点が出土した。うち



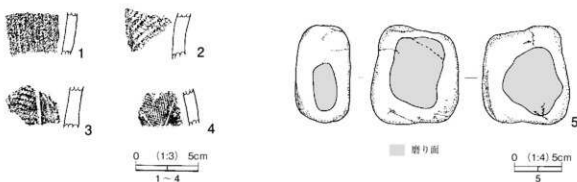
第31図 道地遺跡f地点位置図



第32図 道地遺跡f地点トレンチ配置図



第33図 道地遺跡f地点土層断面図



第34図 道地遺跡f地点出土遺物

5点を図示した。1・2・3は、縄文土器である。1は、深鉢の胴部で、外面に燃糸文Lが施される。淡橙褐色、褐色で長石・細砂を含む。1Tから出土した。早期の燃糸文系土器と判断される。2は、深鉢の胴部で、外面にRL縄文が複節縄文が施され、左端に沈線の一部が見える。褐色、暗褐色で細砂を含む。3は、深鉢の胴部で、外面にLR縄文と縦方向沈線が施され、一方が磨消される。淡褐色、暗褐色で粗砂を含む。2・3とも3Tから出土した。ともに中期加曾利E式と判断した。4は、壺の胴上部で、外面には細い沈線による山形文、細かいLR縄文が施される。暗褐色で粗砂を含む。3Tから出土した。弥生時代後期と判断した。5は、磨石である。6面に磨った痕跡がある。92mm×104mm×厚さ57mm、重みのある石で重量998.5gである。5TのI層から出土した。縄文時代の石器である。

調査のまとめ

予想に反し、本地点では、遺構が検出されず、遺物も少なかった。

本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市教育委員会 (1986年) 『千葉県八千代市平戸道地遺跡—農業道路敷設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 (a地点)
- 財団法人千葉県文化財センター (2004年) 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2—八千代市道地遺跡—』
- 財団法人千葉県教育振興財団文化財センター (2006年) 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3—八千代市島田込ノ内道跡 (2)・間見穴道跡 (3)・道地遺跡 (2)—』
- 八千代市教育委員会 (2008年) 『千葉県八千代市市内道跡発掘調査報告書 平成19年度』 (c地点, d地点)
- 八千代市教育委員会 (2009年a) 『千葉県八千代市市内道跡発掘調査報告書 平成20年度』 (e地点確認調査)
- 八千代市教育委員会 (2009年b) 『千葉県八千代市道地遺跡e地点・平戸台8号墳—資材置場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

図版 10 道地遺跡 f 地点



(1) 調査前状況



(2) 1T 土層断面 (A-A')



(3) 3T 土層断面 (B-B')



(4) 調査状況



(5) 出土遺物 (番号は、第 34 図と同一)

10. 麦丸遺跡 h 地点

遺跡の立地と概要

麦丸遺跡の立地等については、g 地点の項を参照されたい。

h 地点は、遺跡南西端部、標高 23.2 ～ 23.8m の平坦地に位置する。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせた 5m 四方のグリッドで区画し、2m × 3 ～ 5m のトレンチを 24 箇所計 200m² 分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 23 年 1 月 24 日から 28 日で、24 日機材搬入、トレンチ設定。24 日・25 日人力による掘削。25 日・26 日重機による掘削、トレンチ内精査。27 日・28 日土層調査、実測記録。28 日機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区中央南東寄りの F-7T 北西壁では、厚さ 20cm の表土層（暗褐色土・灰褐色土層、しまり・可塑性とも弱い）、Ⅱ b 層（褐色土、新期富士テフラ層）、Ⅱ c 層（褐色土、ローム漸移層）、Ⅲ 層（褐色土、ソフトローム）が認められ、Ⅳ ～ Ⅴ 層（褐色土、ハードローム）の上面までを確認した。深さ約 60cm であった。調査区南西部の E-12T 北西壁でも同様の土層が認められた。Ⅲ 層（ソフトローム）の上面の標高は、22.84 ～ 23.1m、Ⅳ ～ Ⅴ 層（ハードローム）の上面の標高は、22.5 ～ 23.0m であった。

遺構は、調査区北東部の F-5T で土坑 1 基（1P）、調査区中央やや南西寄りの E-10T で土坑 2 基（2P、3P）が検出された。1P 土坑・2P 土坑は、Ⅱ b 層より下で検出されたことや形態・覆土の状態から、縄文時代の遺構とし、1P は陥穴、2P は土坑と判断した。但し、縄文時代の遺物は出土しなかった。3P 土坑はⅡ b 層を切っており、E-10T で土師器片が出土し、南西隣の E-12T では石製模造品の双孔円板と土師器片が出土した。土師器片はいずれも小片であるが、ロクロ成形痕が見られないため、3P を古墳時代の土坑と判断した。

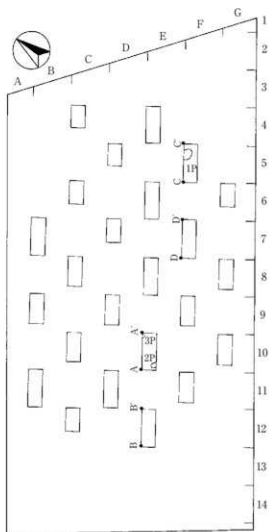
遺物は、古墳時代と推定される土師器片 7 点と石製模造品（双孔円板）・焼礫片各 1 点、合計 9 点が出土した。土師器は、E-10T I 層から 5 点、E-12T I 層と F-11T I 層下部から各 1 点出土したが、いずれも小細片のため図は省略し、石製模造品（双孔円板）を図示した。暗灰色の滑石製で、計測値は、最大幅 30.5mm、最大長（残存）28mm、厚さ 2 ～ 4mm、重量 5.6g である。側面には部分的に磨きの痕跡がある。片面穿孔。両面に磨きが観察されるが、凹凸が激しい。縄文土器片錘に見られるような挟りが一対見られる。

調査のまとめ

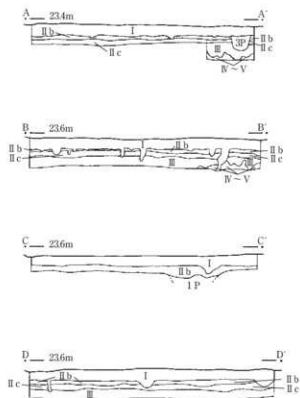
縄文時代と考えられる陥穴・土坑各 1 基、古墳時代と考えられる土坑 1 基が検出された。また、土師器片及び石製模造品（双孔円板）が出土した。遺構については、平成 23 年 2 月に本調査を実施し、23 年 5 月～ 10 月にその本整理を実施して発掘調査報告書を刊行した。本整理の結果、1P は、陥穴ではなく円筒状に掘られた土坑と改め、2P とともに墓坑と推定した。

h 地点本調査の報告書

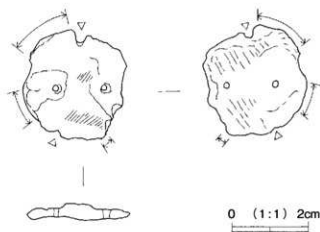
八千代市教育委員会（2011 年）『千葉県八千代市麦丸遺跡 h 地点一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』



第 35 图 麦丸遺跡 h 地点遺構配置図



第 36 图 麦丸遺跡 h 地点土層断面図



第 37 图 麦丸遺跡 h 地点出土遺物

図版 11 麦丸遺跡 h 地点



(1) 調査前状況



(2) F-5T 遺構検出状況



(3) E-10T 土層断面 (A-A')・遺構検出状況



(4) E-12T 土層断面 (B-B')



(5) F-7T 土層断面 (D-D')



(6) 調査状況



(7) 出土遺物 (双孔円板)

11. 南海道遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

南海道遺跡は、市域中央部、新川の西岸に所在する。萱田遺跡群の北東部、標高8～12mの低台地上に立地する。遺跡上には萱田の集落が成立しており、遺跡の詳細な状況はわからず、今回が初めての調査であるため、本地点でどのような知見が得られるか、期待された。

調査の方法と経過

2m×4mのトレンチを任意に2箇所合計16㎡分設定し、重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年3月2日から8日で、2日トレンチ設定、重機による掘削、トレンチ内精査。3日・4日土層調査、実測記録。8日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

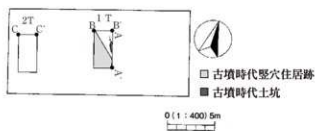
土層の観察所見としては、調査区中央の1Tでは、表土(埋土)及び攪乱層の下に、暗褐色土層(Ⅱ-1層、砂質だが緻密。黄色スコリアを多量、焼土粒子、炭化粒子を含む。)が厚さ22～40cm堆積し、地表下50cm前後、標高約12.0mでⅢ層(褐色土、ソフトローム)に達する。西方の2Tでは、表土(埋土)及び攪乱層が大部分を占め、Ⅱc層(褐色土、ローム漸移層)がわずかに見られ、地表下25cm、標高約12.3mでⅢ層(褐色土、ソフトローム)に達する。

遺構は、1Tにおいて、Ⅱ-1層の下に、Ⅲ層を掘り込む土坑1基と竪穴住居跡1軒が検出された。覆土とともに黒褐色土で、竪穴住居跡の覆土の方が暗色で炭化材片を含んでいた。

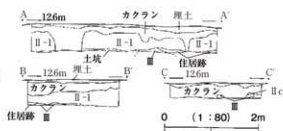
遺物は、両トレンチから土器片24点、瓦片・鉄釘各1点、合計26点が出土した。ほかに土師器小片2点を表面採集した。6点を図示した。1は、縄文土器の深鉢胴部で、外面は横・斜方向のナデ、黒褐色・淡灰褐色で、繊維・粗砂・細砂を多く含む。1Tから出土した。前期の繊維土器である。2～4は土師器で、1Tから出土した。2は、鉢の口縁部で、外面には横方向のナデ、橙色で細砂・粗砂を含む。復元口径136mm、残存高17mmである。3は、甕の頸部で、外面には横方向のナデ・縦方向のミガキが施される。淡橙褐色・暗褐色・淡褐色で細砂・粗砂を含む。復元頸部径130mmである。4は、甕の底部で、



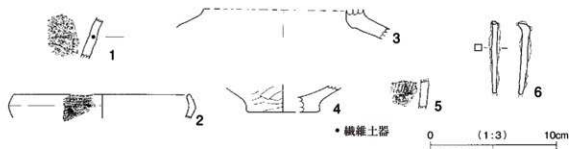
第38図 南海道遺跡 a 地点位置図



第39図 北海道遺跡a地点遺構配置図



第40図 北海道遺跡a地点土層断面図



第41図 北海道遺跡a地点出土遺物

外面はヘラ削り、暗褐色・橙褐色で、細砂・粗砂を多く含む。復元底径56mm、残存高21mmである。3・4は、古墳時代後期の甕であろう。5は、土師質の須恵器で、甕の胴部小片である。外面に叩き目が見える。橙色で、細砂を多く含む。1Tから出土した。6は鉄釘で、短軸断面7.5mm×11mmの方形で残存長56mmである。2Tから出土した。

調査のまとめ

地表面に遺物の散布を確認したことを初め、遺物・竪穴住居跡1軒・土坑1基を検出した。遺構は、遺物から見て、古墳時代後期に属するものと判断した。標高12m前後の低台地に立地した集落跡が存在することを確認できた。今後もこの地区には注意して行きたい。

図版 12 南海道遺跡 a 地点



(1) 遺跡遠景



(2) 調査前状況



(3) IT 遺構検出状況



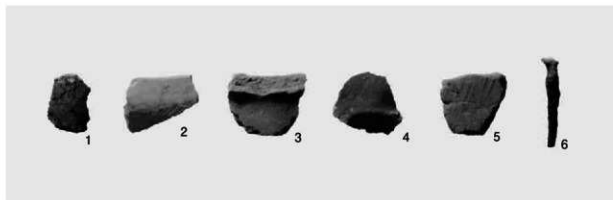
(4) IT 土層断面 (A-A')



(5) IT 土層断面 (B-B')



(6) 2T 土層断面 (C-C')



(7) 出土遺物 (番号は、第 41 図と同一)

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しないいせきはつちつちょうさほうこくしょへいせい23ねんど							
書名	千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成23年度							
副書名	本戸前塚 上谷津台南道路f地点 役山東道路c地点 高津新田野馬福道路j地点 内野南道路e地点 麦丸道路g地点 逆水道跡g地点 役山道路b地点 道地道路f地点 麦丸道路h地点 南海道道路a地点							
編著者名	常松成人							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047 (483) 1151代表							
発行年月日	平成24年3月28日							
ふりがな 所取道跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道跡番号					
本戸前塚	大和田新田字新本戸前119-1ほか	1221	167	35度 43分 22秒	140度 5分 4秒	平成22年 4月19日 ～ 平成22年 5月 7日	60/563	宅地造成
上谷津台南道路 f地点	上高野字上谷津台1103-7ほか	1221	229	35度 43分 25秒	140度 8分 21秒	平成22年 6月15日 ～ 平成22年 7月 2日	70/655	宅地造成
役山東道路c地点	米本字役山2436-17	1221	105	35度 45分 35秒	140度 7分 19秒	平成22年 8月 6日 ～ 平成22年 8月17日	150/1,430	資材置場・ 駐車場
高津新田野馬福 道路j地点	八千代台西九丁目452-1ほか	1221	251	35度 41分 43秒	140度 4分 55秒	平成22年 8月 9日 ～ 平成22年 8月16日	106/1,080	店舗建設
内野南道路e地点	吉橋字内野1102-2の一部ほか	1221	289	35度 44分 12秒	140度 4分 34秒	平成22年 9月 7日 ～ 平成22年 9月24日	90 /1,072.61	集合住宅
麦丸道路g地点	大和田新田字麦丸台649-60・61	1221	151	35度 44分 27秒	140度 6分 5秒	平成22年11月10日 ～ 平成22年11月15日	26 /336.45	宅地造成
逆水道跡g地点	米本字逆水1217-1	1221	100	35度 45分 37秒	140度 6分 57秒	平成22年11月16日 ～ 平成22年12月 2日	430 /4,255	宅地造成
役山道路b地点	米本字鳥ヶ谷1127-1の一部	1221	97	35度 45分 48秒	140度 7分 16秒	平成22年12月16日 ～ 平成22年12月27日	102 /999.99	産業廃棄物 中間処理 施設
道地道路f地点	平戸字沼上36-4の一部	1221	18	35度 46分 27秒	140度 6分 54秒	平成23年 1月11日 ～ 平成23年 1月18日	上層25 下層5.5 /248.14	個人住宅
麦丸道路h地点	大和田新田字麦丸台649-9	1221	151	35度 44分 24秒	140度 6分 4秒	平成23年 1月24日 ～ 平成23年 1月28日	200 /1,986.59	宅地造成
南海道道路a地点	萱田字西堀737-2	1221	182	35度 44分 5秒	140度 6分 29秒	平成23年 3月 2日 ～ 平成23年 3月 8日	16 /172.8	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木戸前塚	塚	近世	近世塚1基・土坑2基	近世陶器・砥石・寛永通宝	
上谷津台南遺跡f地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（後期）	
役山東遺跡c地点	集落跡	縄文時代、古墳時代	縄文時代陥穴1基、古墳時代前期竪穴住居跡1軒	古墳時代前期土師器	
高津新田野馬堀遺跡j地点	牧跡	近世	近世野馬堀1条	近世陶磁器	
内野南遺跡e地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器（後晩期）	
麦丸遺跡g地点	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
逆水遺跡g地点	集落跡	縄文時代、中世	縄文時代陥穴1基、縄文時代竪穴住居跡1軒、中世土坑2基	縄文土器（中期）	
役山遺跡b地点	集落跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代	縄文時代早期竪穴10基・土坑7基、弥生時代後期竪穴住居跡2軒、古墳時代前期方形周溝状遺構1基	縄文土器（早期～後期） 弥生土器（後期） 古墳時代前期土師器	
道地遺跡f地点	包蔵地	縄文時代、弥生時代	なし	縄文土器・磨石、弥生土器	
麦丸遺跡h地点	包蔵地	縄文時代、古墳時代	縄文時代土坑2基、古墳時代土坑1基	土師器、石製模造品	
南海道遺跡a地点	集落跡	縄文時代、古墳時代	古墳時代後期竪穴住居跡1軒・土坑1基	縄文土器（前期）、古墳時代後期土師器	
要約		<p>木戸前塚 近世土坑2基と近世・近代の溝跡などを確認した。全体的に基本層序が失われており、攪乱が激しかったものと判断した。本調査の結果、確認調査の所見と異なる点が明らかとなり、1Tの土坑は、塚封土の供給源である溝状遺構、5Tの土坑は、塚構築後の土坑と判断した。また1M溝跡と10Tの溝跡は、同一のものとして判断した。</p> <p>上谷津台南遺跡f地点 縄文土器が出土したが、遺構は検出されなかった。土層の高まりは、近年の盛土であることを確認した。</p> <p>役山東遺跡c地点 縄文時代の陥穴と考えられる土坑1基、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒を確認した。台地中央部に近い地点でも遺構の存在を捉える事ができ、今後、台地縁辺部だけでなく、台地中央部の調査においても注意が必要であることがわかった。</p> <p>高津新田野馬堀遺跡j地点 野馬堀と見られる溝跡1条を確認した。高津新田野馬堀遺跡の範囲内で現在把握できている西の限界ということになる。野馬堀については、地中に残っている箇所がまだ多く存在すると思われるので、今後注意が必要である。</p> <p>内野南遺跡e地点 縄文土器が出土したが、遺構は検出されなかった。本地点は、遺跡北端に近い希薄な地点であった。</p> <p>麦丸遺跡g地点 土層の残存状態が悪く、遺構・遺物とも検出されなかった。</p> <p>逆水遺跡g地点 攪乱が激しかったが、縄文時代の陥穴1基、中期初頭の竪穴住居跡1軒、中世の土坑2基を確認した。</p> <p>役山遺跡b地点 遺構・遺物とも密度の高い地点であった。本遺跡が縄文時代早期の竪穴群・早期～中期の土坑群、弥生時代後期の集落跡、さらに古墳時代前期の墓域から成るといふ新知見を得た。</p> <p>道地遺跡f地点 遺構が検出されず、遺物も少なかった。</p> <p>麦丸遺跡h地点 縄文時代の陥穴・土坑各1基、古墳時代の土坑1基を確認した。また、土師器片及び石製模造品（双孔円板）が出土した。本調査の結果、縄文時代の遺構は、陥穴ではなく円筒状に掘られた土坑と改め、他の1基とともに墓坑と推定した。</p> <p>南海道遺跡a地点 古墳時代後期の竪穴住居跡1軒・土坑1基を確認した。本遺跡が、標高12m前後の低台地に立地する集落跡であるという新知見を得た。</p>			